

住田・林兩先生を偲ぶ

住田・林兩先生を偲ぶ



故住田智見講師略年譜及遺著目録

一、年 譜

元明	治一	歲	十一月廿三日	名古屋市南區熱田千年町祐誓寺に生る。父は惠見、母をりやうと云ふ。男二人女三人の同朋にして師はその長男にて幼名を徳丸と呼ぶ。
同	五	歲	八月十五日	祐誓寺衆徒として得度す。
同	十八	歲	十一月十五日	知見と改名す。
同	十九	歲	十二月十一日	父惠見と死別す。
同	二十	歲	二月	尾張教校を卒業す。
同	二十二	歲	七月	眞宗大學專門別科に入る。
同	二十五	歲	七月二十日	眞宗大學專門別科を卒業す。
同	二十八	歲	七月十八日	眞宗大學本科を卒業し、進學となる。
同	三十	歲	八月三日	眞宗大學研究科を卒業す。
同	三十二	歲	八月廿二日	尾張中學寮教授兼舎監となる

同廿九年 二十九歳 八月八日

眞宗尾張中學教授となる。

同三十年 三十歳 十二月十三日

眞宗尾張中學長兼教授に任ぜらる

同卅六年 三十六歳 十一月十四日

眞宗大學教授に任ぜらる。

同卅七年 三十七歳 八月廿八日

母りやうの死にあふ。

同卅八年 四十歳 二月八日

擬講を命ぜらる。

同卅九年 四十歳 二月八日

擬講の稱號を受く。(學階條例の改正に依る)

元大正元年 四十五歳 十二月九日

嗣講の稱號を授與せらる。

同四年 四十八歳 十一月九日

眞宗大谷大學教授に任ぜらる。

同五年 五十歳 七月廿二日

知見を智見と改む。

同六年 五十三歳 九月一日

安居次講を命ぜられ、『淨土源流章』を講ず。

同七年 五十四歳 一月二日

上杉文秀、稻葉圓成の二師と共に支那佛教視察に赴く。

同八年 五十五歳 九月一日

眞宗大谷大學教授を辭す。

同九年 五十七歳 七月十九日

侍董察出仕を命ぜらる。

同十年 五十七歳 七月十九日

眞宗專門學校教授となる。

同十一年 五十七歳 七月十九日

講師の稱號を授與せらる。

昭和元年 五十九歳 七月

安居本講を命ぜられ『三帖和讃』を講ず。

同四年 六十二歳 八月廿一日

眞宗大學院教授に任ぜらる。

同五年 六十三歳 十一月九日

宗學院指導を命ぜらる。

同六年 六十四歳 一月九日

宗學院にて「唯信鈔及唯信鈔文意の研究」を講ず。

同七年 六十五歳 七月

安居本講を命ぜられ、『尊號眞像銘文』を講ず。

同八年 六十六歳 四月

大谷大學學部教授を囑託せらる。

同九年 六十七歳 六月廿三日

四月より宗學院にて「一念多念證文」を講ず。重信會館にて「菩薩行の廻向なる學術講演」をなす。

同十年 六十七歳 九月

九月より宗學院にて「唯信鈔文意の研究」を講ず。

同十一年 六十七歳 九月

九月より宗學院にて「唯信鈔文意の研究」を講ず。

講す。

同一年 六十八歳 四月より宗學院にて「改邪鈔の研究」を講ず。

同一年 六十九歳 三月 大谷大學々部教授を辭す。

七月 安居本講を命ぜられ「念佛正信偈」を講ず。

八月 大谷大學長に任ぜらる。

十二年 七十歳 九月十八日 大谷大學長を辭し、同學部教授を囑託せらる。

十二月より宗學院にて「御本書と御文の交渉」を講ず。

十三年 七十一歳 七月一日 僧正に補せらる、同日自坊祐誓寺に於て示寂す。御染筆院號法名

「成徳院智見」並に似影を下附せらる。

七月 午後二時自坊にて密葬を行ふ。

七月十一日 午後二時名古屋別院にて本葬執行。

號を古灰、又は閑凡夫と稱す。

二、著書

大正元年刊 和讃大綱一卷(尾張國講習會録)

同四年刊 淨土源流章講録(安居講録)一卷

同五年刊 正像宋和讃講義(佛教通信)

同九年刊 觀無量壽經講義(同右)

同十年刊 正信偈講義(同右)

同十一年刊 教行信證管窺(尾張國講習會録)

同十二年刊 眞宗要義(中外聖典所收)

同十三年刊 教行信證管窺(尾張國講習會録)

同十四年刊 淨土源流章解説一卷

同十五年刊 大谷派學匠著述目錄大谷派先輩學系略(眞宗大系所收)

同十六年刊 三帖和讃講義(安居講義)一卷

昭和六年刊 教行信證御自釋管窺一卷

同七年刊 尊號眞像銘文講義二卷

同八年刊 教行信證御自釋管窺(尾張國講習會録)

同九年刊 弘願眞宗の信心一卷

同十年刊 他力眞實の信心一卷

住田・林兩先生を偲ぶ

同 十一年 刊 念佛正信偈講讚一卷
同 年 刊 觀稱と尊號の史的雜考一卷

尙ほ他に執筆刊行せるパンフレット四十九種あり。

三、編輯、解題、校訂

四、遺稿

明治四十年 刊 蓮如上人全書

同四十二年 刊 教行信證大意

同 年 刊 執持鈔

同四十二年 刊 親鸞聖人全書

大正二年 刊 廣本尊號眞像銘文

同 年 刊 大正校訂教行信證御自釋

同 年 刊 親鸞聖人御傳鈔

同 三年 刊 大正校異淨土文類聚鈔・入出二門偈・愚禿鈔

同 年 刊 歎異鈔

同 七年 刊 抄出歎異鈔

同 十五年 刊 皇太子聖德奉讚

昭和 五年 刊 夏の御文

同 六年 刊 笠間念佛疑問返事

同 七年 刊 香涼院行忠師眞宗要目五十題講述

同 年 刊 香山院師大無量壽經悲化段記

同 九年 刊 三河念佛相承日記

老南 廣文類論草 講師

相承要義 (大正四年―同五年筆)

七祖ノ系統 (明治三十六年筆)

玄義分己末講案 (大正八年筆)

定善義講案 (大正四年筆)

往生要集私纂 (明治三十九年筆)

選擇集私纂 (明治四十一年筆)

略文類論叢 (明治二十九年筆)

愚禿鈔私纂 (明治四十一年筆)

後世物語自力他力私纂 (明治三十九年筆)

六要私纂 (明治三十六年―同四十一年筆)

六要鈔講案

六要鈔論條 (明治三十六年筆)

夏ノ御文講錄 (明治三十七年筆)

安心決定鈔私纂 (明治三十八年筆)

眞宗要旨 (明治二十九年筆)

宗義概要 (大正五年筆)	同	同	一號	先輩學系略
宗意要目辨	同	同	一六卷	五號 親鸞聖人の佛陀觀
宗學論稿 (明治三十六年筆)	同	同	同	八號 或る法體家の一形式
宗乘隨時講案	同	同	一七卷	一〇號 嘉祥大師著作の前後に就て
所歸問題	同	同	十八卷	四號 寬永丙子本の教行信證に就て
教義研究資料	同	同	同	六號 寬水本信卷の奥書に就ての正誤及補遺
宗乘余乘論目集	同	同	同	同 元祖門下と諸行
異安心史考上中下 (明治四十一年筆)	同	同	一九卷	二號 一派初期の學者
蓮師以後ノ異義	同	同	同	四號 教行信證拜讀の沿革及研究の用意に就て
異義史要 (大正三年筆)	同	同	同	九號 元祖法然上人傳の一疑問
三祖同異	同	同	二〇卷	一一號 凝然大徳の淨土教系に就て
三業タノミ	同	同	二二卷	二號 幸西隆寛長西三流の衰退理由の一
日本淨土教史 (大正七年筆)	同	同	同	七號 八萬の法藏を知ると云ふともの典
淨土教史講案 (大正八年筆)	同	同	同	據
華嚴宗史 (明治三十六年)	同	同	同	據

五、諸雜誌掲載論文目録

無盡燈 八卷 四、五號 寶曆文化間の三業惑亂關係書目	同	同	二三卷	四、五號 覺如上人と異解者
同 九卷 二號 略論の選者に就いて	同	同	二三卷	六、一〇號 眞本漢語燈錄と三部經私記
	同	同	二四卷	三號 元祖の往生要集釋

住田・林兩先生を偲ぶ

佛敎研究	一卷	一號	眞宗學と義門
宗學研究		二號	尊號に就て宗祖以來の化風を思ふ
同		一五號	御再興の上人と申すこと
眞宗學報		一號	蓮如上人安心決定鈔御依用の意
同		二號	如實修行の義
同		三號	女性問答の御文に就て
同		八號	宗祖の新譯經本御依用につきて
同		一六號	閑窓隨筆
同		一七號	閑窓隨筆
眞宗學報		五號	阿彌陀經の譯出について
眞宗研究		一號	たのむいはれの御相承
同		四號	道綽傳の瓚禪師
同		同	道綽禪師傳の一端
救濟	一編	二號	教行信證と歎異鈔に就て
同	六編	一二號	教誡の起源
布敎界	一卷	一號	異安心調理の梗概
同	同	一一號	門下諸師の事ども
同	三卷	一號	蓮如上人前後の祕事法門
法藏	蓮如上人號		蓮師時代の異義
同		二〇〇號	見眞大師の信仰

同 四三三、四三三、四三四號 眞宗所歸問題の考察
 同 五〇〇號 正信念佛偈の解題

他の説敎講話乃至隨筆等のものは多數あれども今略之

以上

附記 遺稿は偏に全集刊行委員の調査になる遺稿目錄に據る
 深謝之。(小串侍編)

住田先生御終焉の記

稻葉圓成

一

私は不思議な御縁で先生の御終焉に侍り親しく先生の御往生のお姿を拜することを得まして、「信仰」の力強さをしみじみ感じました。

先生の御往生は七月一日であつた。その日私は眞専校の出勤日で朝登校すると先生の病容が急變して危篤の状態であり、命旦夕に迫るとの通報に接しました。實は廿七日午前先生の病床をお見舞した時には、前の十四日の容態に比して大變元氣でもあり、先生自らも、此分では或は此夏を持ちこたへるかも知れぬと冗談のやうに笑ひながら語られた程だつたので、安心して居た矢先であるから、危篤の報に殊の外驚かされた。すぐお寺へ電話で御尋ねすると、早朝から昏睡状態であるが、今晚まではも

ちこたえるだらうとのお知らせに、學校の退引きならぬ仕事を急いで處理をし、お寺へ駆けつけたのは、その日の午後三時少し前であつた。祐誓寺の大廣間で、御令弟から御病氣の模様を承つて居る裡に、病室から御令弟を呼びにこられて、令弟が慌たゞしう病室へ駆け込んで行かれたので、「いよいよ最後の時が來た」ことを觀じまして、胸を轟かしつゝ、席間に獨り念佛して居りますと、看護婦が私にも病室へといふので後を遂ふて先生の病室へ入りました。先生は北枕に蒲團に寄りかゝつて眠つてお出にゐる。私は脚下に坐つて先生の御容貌を凝視しますと、どうでしやう。靜かに眠つて居らるゝ先生の御顔には、今朝未明までは、擦腸まで發したので非常な苦痛に襲はれたといふ、その苦痛の名残はどこにもないばかりでなく、いかにも安らかに靜かに寢息をなさつてあるで

はないか。恰も昨夜までは荒れ狂ふた海原が、今朝は油を流したやうな青海原であるやうに、あまりにも安らかであり、あまりにも静かである。私はその御顔ばせを拜し上つた一瞬に、信仰は何といふ偉大な力を持つて居るか、魂の安らかさは、肉體の動亂を征服したではないか「信は力なり」といはれた清澤先生の語の意味を、私は先生の御終焉に實證するを得たのである。

二

六月十五日朝。先生は病床にありて左の如き辭世の歌をお認めになつた。

同一念佛無別道故

念佛してまゐりたまひし父母の

みあとを踏みて我はゆくなり

一生雖盡希望不盡

老ぬれと娑婆執着の凡愚かな

七十有一なから世の中

戊寅梅雨病中

閑凡夫智見

私は八月初に東北の旅行から自坊へ歸りついた朝、山積して居る郵便物中にあつた祐誓寺から、お贈り下さつた、寫眞版で始めてこの絶筆を拜見した。そして前の御終焉に實證した信力の偉大さを更に確かめられ、大きい衝動を感じました。それは、その筆蹟が猷健で、先生の平生と少しもかはりのないといふよりは、むしろ平生よりも更に立派な一字一句力に充ちて居るのである。私はその前日の六月十四日の午後にも、親しく先生の病床でお會ひしたのであるが、その時は月の初の大苦痛のあつた直後の事とて、非常に衰弱をせられて居り、お話を聴取するにも非常に困つた程であつた。その病態であのやうな猷健な筆が揮へたといふは全く奇蹟である。尋常人の到底眞似ることの出来ないことである。精神力がよく肉體を征服し得るに非ずんば、此奇蹟は解けない。先生にありて、全く信力は能く肉體の衰耗を無視し、これを征服し得たのである。それは先生といふ特殊な人によつてのみ成し遂げられたのではなくて、信仰に生きる何人も追隨し得る事である。信力はよく體力に打勝つことを先

生は身を以て示されたのである。

因に辭世歌揮毫の日即ち十五日午後には、先生が多年繼續されいかなる障礙をも排除して一回も休講されなかつた祐誓寺講話日(一日と十五日)に當つて居たので、先生は主治醫がお止めしたのを肯んぜず、あの衰弱し切つた病軀を、人に扶けられながら本堂の講壇に立ち、僅か五分間であつたが、最後の講話をせられた。その時辭世歌の「老ぬれど」を發表された。これが先生の涅槃講となつた。その講話が言々全生命を打ち込んだものであり微音ではあるが、力強いはり充ちた音響は、玄關を隔てた大廣間にまでよく聴取られたといふ事である。

先生の御往生前四日即ち六月廿九日、本山に學階銓衡會が開かれた。私も審査委員の一人であつたので、朝本山に出頭し、先生から提出されて居る審査報告書を内拜したが、代筆ではなく先生の直筆で原稿紙二枚に、例の先生の原稿と同じやうに、簡單ではあるが要領を得、その批評の如き肯緊に當る適切のもので實に立派な報告書である。私も先生の審査された同じ論文の審査を命ぜられ

て居つたから、懷中には自分の審査報告書を持參して居るが、先生のそれに較べると遙かに見劣りのすることゝ恥かしく思つた程である。―その時は、かういふ報告書が書ける程に、先生はシツカリして居られるのだから、病氣の方も或はもう一度持ち直すのではないか、主治醫その他から聞いて居る絶望的豫想が裏切られるかも知れないと、報告書を見て一縷の希望を懷いたのである。私は廿七日午前先生にお會ひした時は、前にも叙べたやうに十四日にお會ひした時よりは大分よろしいやうにもお見受けした矢先に此の報告書に接したのだから、さう判断したのである。しかるに後になつて承れば、その廿九日から病勢が頓に革まり、終に一日の御往生となつたのであつた。

私は前項に叙べた辭世歌の揮毫に接して、信力の偉大さを實證してから、ふり返つて見ると、先生は腸癌の苦痛に五體を傷ましうまでに虐けられつゝも、頭腦のはたらきが、少しもそれに影響されなかつたればこそ、あのやうな、膨大な論文を審査し而も立派な報告書が作製さ

114
れたのである。此にも前項と同様に信仰は肉體を征服す

るといふ結論に到達するのである。

恩師住田先生を懷ふ

加藤智學

一

眞宗大學が京都から東京の巢鴨へ移されたのは明治三十四年の九月であつた。學監には清澤滿之先生が就任せられ、主幹は關根仁應先生であつた。(その頃は學長のことを學監と稱したのである。)學校の制度も變つて、四年が五年になり、豫科二年、本科三年、その本科が宗乗科・華嚴科・天台科・性相科の四部分たれ、その上に研究院五年が設置せられた。教授には南條文雄・石川了因・豐滿春洞・齋藤唯信・等の諸先生が就任せられ、當時わが一派の教學は實に各宗に冠たるものであり、將來の希

望頗る深大なるものがあつた。此の時、宗乘(眞宗學)餘乘(佛教學)を教授する俊英なる若き學匠として招かれたるは、上杉文秀・河野法雲・住田智見・中島覺了・等の諸先生であつた。此等の諸先生は、かくて巢鴨の學園へ就任せられた其の當時は、みな學師であり、意氣潑刺たる若き學者であつた。私は此の明治三十四年の六月眞宗東京中學を卒業し、その九月、巢鴨に新築せられたる眞宗大學の豫科一年へ入學した。その頃、我大谷派の學校は、大學も中學も、學年の初は九月で學年の終は六月であつた。それで私は九月再び東京へ出て其の新築せられたる美しき校舎に於て諸先生の講説を聽いたのである。

それまでに私は住田先生の芳名を知聞しては居たが、その英姿を拜し其の訓言に接するを得たるは、此の年からのことである。住田先生は御病弱のやうに見うけられ其の容姿は偉大ではなかつたが、其の道心の深く信念の堅牢なること、實に世に稀なる御方であつて、後進の我等がために正しき指針と爲つて下された雄大なる人格であつた。私は今以てあの巢鴨の學園に學んだことを無上の幸福なりしと思ふものであるが、諸先生より受けし教育の御恩を思ふ時、そのなかに住田先生の御指教を受けしことのありしを、まことに難有き仕合せなりしと慶ばすには居られない。

二

住田先生の御教授を受けたなかに、私として最も印象の深いのは、本科一年の時に『教行信證』の教卷・行卷の講義を聞いたことである。その頃、巢鴨の學園に於ける宗典の講義は、豫科の一年に『往生論註』、豫科の二年に『選擇集』、本科の一年に『教行信證』の教卷・行卷、本科

の二年に信卷・證卷、本科の三年に眞佛土卷・化身土卷の講義があり、そのほかに宗乘として種々の講説が行はれてゐた。宗乗科が存置されたのは二年間で、私共が本科の學生に爲つた頃からは、本科は華嚴科・天台科・性相科の三部に分たれ、宗乘は全部の學生が必修せねばならぬ。最も重要な學科と爲され、卒業論文も宗乘と餘乗と二種の論文を書かねばならず、授業の時間も、宗乘には相當に多數の時間が當てられてゐて、各科の學生、宗乘の講義を聴く時には、一教室に於て聽講したものである。私は性相科で『俱舍』『唯識』を專攻して居たが、『教行信證』その他の宗乘の學科に於ては頗る懇切なる指教を受けたものである。かくて其の本科一年に於ける住田先生の『教行信證』の講義を聽受し得たることは、まことに難有く慶ばしき事であつた。

先生は講説せんとする時、念佛まうし／＼先づ其の講本を頂いて、それから講義を始められた。かうした事は先生だけではないけれども、その頃の若い學生に、特に先生のさうした行狀が、行學としての宗乘を、切實に示

教せられたものであつた。先生はお若い頃から正信念佛の行人であらせられた。行住坐臥に低い聲で稱名せられたお方である。だから教室に於ても時々低聲に念佛して居られた。『教行信證』の行卷の講義を聽いて居る時、此

の行卷に明さるゝ所の行は能行の稱名念佛であるか所行の名號であるかと云ふやうな問題が、未熟な若い學生には、決擇し難い事義として、其の意を悩ましてゐた。先生は、はつきりと指示せられた。「大行といふは則ち無礙光如來の名を稱するなり」爾れば稱名は能く衆生の一切の無明を破し能く衆生の一切の志願を満てたまふ」等とあれば、行卷所明の大行は稱名念佛である。『六要鈔』に「行は所行の法、信は是れ能信なり」と釋せられてある其の「所行の法」と云はるゝのも存覺上人にありては稱名念佛のことである。而して此の大行の行體は佛の名號である。行者の稱念する機功を思ふてはならぬ。佛智廻向の名號不思議の御力によりて救はるゝのである。されば、念佛の行者は、聊かも自功を思はず、佛智廻向の至徳の尊號を信樂し受行して、佛恩を念報すべきである。先生に

よりに私共は斯うした信念に任せしめていたゞき、心勇しく稱名念佛して『教行信證』を拜讀する身となつた。

若き學徒の間には、佛名を稱ふるといふことは、第二義的に思惟せられ、それが信念の本質的なものであり第一義であるとは考へにくゝ、念佛も意念的に修得してゆかうとする動向があつた。これは何れの時代にも斯うした思想の動きは有るものと思ふ。然し我が淨土眞宗の大行、選擇本願の行は、觀念ではなく意念ではなく、佛の至徳の尊號を稱念し執持する稱名念佛である。先生が『教行信證』の行卷を講じて居られし砌、教室に於て私は、先生より其をはつきり承つて置き度く思ふたから、「先生。この大行の念佛は、私共が唇を動かして南無阿彌陀佛と稱ふる此の稱名念佛でありますか。佛願に信順し佛智を受行して佛名を稱念する斯うした口業の行ひでありますか」と、わざと口稱の義を強く顯して質問したことがある。その時、先生は、はつきりと「さうであります」と答へて教授せられた。二十一歳の若い意の私には、かうした明快なる答説を聽いて、眞宗念佛の大義

を、はつきりと領解することができた。なんでもない事のやうであるが、これが、あの當時の我等青年學徒にとりては、かなり重大な事なのである。浩浩洞に於て、求道學舎に於て、絶對他力の信念は大に唱導せられ、『歎異鈔』の御法語は、さかんに講ぜられて居る時ではあつたが、「親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまいらずべしと、よきひとのおほせをかうふりて信するほかに別の子細なきなり」と仰せられたる祖聖の御言葉を口ずさみながらも、其の「たゞ念佛して」の御一言がどうしてもしつくりと領受できない氣持ちに成つて居つた人が少くはなかつた。それがあらぬか、若き人々の信仰坐談會へ参加して出席したる時、餘りにも稱名の聲を聞くことの少く意念の動きが著しく眺められたものであつた。私はどうしてもさうした思想的信仰に物足らぬ感じがしてならなかつた。かくて私は巢鴨の學園に於て『教行信證』の講義を聴き、住田先生の身を以て示されたる尊き念佛の訓に接して、稱名念佛の尊き難有さを思ふやうになり、よほ／＼ながらお念佛まうさせていたゞく身とも

住田・林兩先生を偲ぶ

爲つた。私には多數の恩師があり道友がある。其等の師友に引き立てられて、隨分氣儘を云ひながら、餘り甚だしく脱線はせずに修道の一路を辿つて來たが、その御恩を思ふ時、住田先生は、どうしても忘るゝことのできない私の大恩師である。

三

教室だけではなく、私は學生時代に屢々住田先生のお宿を訪ねて教を受けたものである。宗意安心に就て幾多の問題を持つて往つて先生の懇切なる指教を仰いだ。私とは若い時には論客であつて、幾多の師友を訪ねて議論してあるいたものである。分らない事は、どこまでも論究せなければ氣が濟まぬ。そこで、なんべんでも同じ問題に就て論究したり問答したりした。住田先生にも分らない事をいろ／＼お尋ねした。

宗祖聖人と蓮如上人との化風の相異、それは化風とばかり云ふて居られないほど餘りにも大いに其の安心の表現が異なつて居る。此の事に就ては幾度か先生にお尋ね

して教を受けたものである。或る先進の學者は宗祖と蓮師は安心が違ふと云ふて居られた。さう聞かされて見ればさうかとも想はるゝほど御教化の御言葉がちがふ。さうかといふて、御安心が違ふと、あつさり云ふて片つけては居られない。そこで斯うした行信に關する問題を屢々持つて往つて、ねちこく先生に質問したものである。宗祖は「彌陀の本願とまふすは、名號をとなへんものをば極樂にむかへんとちかはせたまひたるを、ふかく信じてとなふるが、めでたきことにて候なり」等と仰せられてゐる。善導大師・法然聖人と同じく、稱名念佛は佛願に順するが故に往生の正定業であるとして、念佛して、淨土に往生すると深く信じて稱名念佛せよと勸化せられてゐる。然るに蓮師の御教化には斯うした御言葉がない。「一心にふたごゝろなく彌陀一佛の悲願にすがりて、たすけましますとおもふこゝろの一念の信まことなれば、かならず如來の御たすけにあづかるものなり。このうへには―わがいのちのあらんかぎりは、報謝のためとおもひて念佛まうすべきなり」「一念の信心發得以後の念佛をば

自身往生の業とはおもふべからず、たゞひとへに佛恩報謝のためとこゝろえらるべきものなり」等と訓へられてゐる。雜行すて、後生たすけたまへとたのむ者をお助けと信じて、そのうへの稱名は御恩報謝のおもひで相續せよと勸められてゐる。信後相續の念佛をば自身往生の業とはおもふべからずとさへも仰せられてゐる。かやうに宗祖と蓮師と其の化風が異つてゐる。これは宗學を修むる初心の者には非常にむづかしい問題である。私は此の事に就ては學生時代にも卒業後にも幾度か先生にお尋ねして懇切なる御教育にあづかつた。いつも先生は申された。蓮師の時代には、道場に集つて念佛まうしてゐる人はあつたが、無信單行の人・安心の間違ふた人が多くて御一流の正しき安心領解を受得して居る人が極めて少かつた。そこで蓮師は、元祖宗祖の時のやうに念佛を修行せよと行を勸説する必要の少い時であつて、正しき安心を訓へ信心を獲得せよと勸説せなければならぬ時であつたから、あのやうに仰せられたものである。正雜の分別を聞きわけて雜行すて、正行に歸し佛の本願のいはれを

聞きひらいて本願を信じ佛力をたのんで念佛せよと勧められ、信心獲得して往生一定の喜びになられし上の稱名念佛は佛恩を念報するおもひで相續する。斯くの如く意得られたる人こそ眞宗念佛の行者であると訓へられたのであるから、蓮師の御勸化には、雜行正行の行の教へもあるわけで、その専修正行の念佛行者に具はらねばならぬ眞實の信心の未だいたゞかれてない人の多いことを悲んで、他力信心の信相を力説して、信心正因・報恩稱名の宗義を懇切に顯示せられたのである。されば宗祖と蓮師と其の化風に異彩はあるけれども、その宗意安心は一味であつて、相違する所は無い。各その時代の必要によつて、あのやうに仰せられて御勸化なされたものである。私は斯うした旨趣を幾度か先生から承つたことであつた。此の旨趣に就ては先生は頗る懇切に説き示された。

四

數年前、私は、何かの話の節に、亦この蓮師の化風に就て、御老體の先生から御教示を受けた。その時、先生

住田・林兩先生を偲ぶ

は、四帖目の第六通・第七通・第八通の報恩講の御文を注意して拜見せよと訓へられた。先づ稱名念佛・専修專念の行を指示して、それから參詣する人々の無信心なることを悲んで、眞實信心を獲得するやうに勸説せられてゐる。此等の報恩講の御文を拜讀すると、元祖吾祖の御勸化により専修專念に稱名念佛は勤行せられてゐるが、參集する同朋同行のなかには、まことの信心の無い者が多いから、其等の人々を訓誨して信心獲得せしむるやうに勸化せらるゝ蓮師の御苦勞が偲ばれる。そこに行に具はるべき信を力説せねばならなかつた當時の事情が窺はるのである。「抑當月の報恩講は開山聖人の御遷化の正忌として例年の舊儀とす。——しかるあひだ毎年七晝夜のあひだにおいて念佛勤行をこらしはけます。これすなはち眞實信心の行者繁昌せしむるゆへなり。まことにもて念佛得堅固の時節到來といひつべきもの歎。このゆへに一七ヶ日のあひだにおいて參詣をいたすともがらのなかにおいて、まことに人まねばかりに御影前へ出仕をいたすやからこれあるべし。かの仁體においては、はやく御

120
影前にひざまづいて廻心懺悔のころをおこして、本願

の正意に歸入して一念發起の眞實信心をまうべきものなり。「抑今月報恩講の事、例年の舊儀として、七日の勤行をいたすところ、いまにその退轉なし。しかるあひだ、この時節にあひあたりて、諸國門葉のたぐひ、報恩謝徳の懇志をはこび、稱名念佛の本行をつくす。まことにこれ専修專念決定往生の徳なり。このゆへに、諸國參詣のともがらにおいて、一味の安心に住する人まれなるべしとみえたり。―近年佛法は人みな聽聞すとはいへども、一往の義をきゝて眞實に信心決定の人これなきあひだ、安心もうとくしきゆへなり。」「抑今月二十八日の報恩講は昔年よりの流例たり。これによりて、近國遠國の門葉、報恩謝徳の懇志をはこぶところなり。二六時中の稱名念佛、古今退轉なし。これすなはち開山聖人の法流、一天四海の勸化、比類なきがいたすところなり。このゆへに、七晝夜の時節にあひあたり、不法不信の根機において、往生淨土の信心獲得せしむべきものなり。」「かやうに稱名念佛の修行せられてゐることを記して、無信

の人々に信心獲得せしむるやう訓誨せられてゐる。「念佛勤行をこらしはけます」「稱名念佛の本行をつくす」「二六時中の稱名念佛、古今退轉なし」等と仰せられて、それから無信の人をして獲信せしむるやう勸化せられた。されば蓮師の御勸化を元祖宗祖の教旨から離れた異つた教化のやうに思ふてはならない。先生は近年此の事を中心に私に訓示せられた。それから私は此の報恩講の御文を深く注意して拜讀するやうになり、今までよりもありがたく讀ませていたゞくやうになつた。此の御文拜讀の注意は、先生の御遺訓として、私は一生涯忘れず、同信同行の友に語り傳へ度いと思ふて居る。

五

先生は祖師蓮師の御恩徳を追慕せらるゝこと深く屢々靈廟に詣で御墓へ參拜せられたやうである。私は近年幾度か山科へ行き、蓮如上人の御墓・實如上人の御墓・證如上人の御墓等へ參詣して、其の往きか還りかには、必ず山科別院へ參つて、輪番の石川練眞師を訪ねた。石川師は

私の顔を見ると云はれる。「どうも大谷大學の人々はさつぱり山科へ参詣に來ない。蓮如上人の御墓へ、なぜ時々参詣に來ないか。御恩知らずの奴等だ。時々参詣に來られるのは住田先生だけだ」と云はれるから、「わしだつて斯うして時々参詣に來るではないか」と、負け惜みを云ふと、「時々山科へ参詣に來るのは住田先生と君だけだ」と私を附け加へて呉れた。大谷大學の教職員學生が山科へ参詣せないといふことはないけれども、石川師に會はずに歸るから石川師は誰も参詣に來ないと想ふて居らるゝのかも知れぬ。然しまた石川師の云はるゝ如くに蓮師の御墓へ参りに行く人が少いのかも知れない。若しさうであるとすれば、斯うした警告を爲されてゐること故に、せめて一年に一度は蓮如上人の御墓へ参詣することを心がけたがよいではないか。否、石川師の御言葉の有無にかかはらず、蓮如上人の御恩を思ふ者は時々山科の御墓へ参詣すべきである。かくて私は、石川師の云はれた言によつて、住田先生が屢々蓮師の御墓へ参拜なされてゐたことを知つた。此の事ばかりではなく、恐らく先生には不

住田・林兩先生を偲ぶ

言實行の陰徳が幾多あつたことであらう。

先生は、肉食妻帶の宗風のなかに存在しながら、生涯、妻帶せず、獨身であつた。稀有の行狀と申さねばならぬ。お若い頃から病弱であつたせいかも知れぬが、さうかと云ふて妻帶できないやうな病體では無かつたやうにも想ふ。道心深くして佛法の學問に專注せられた先生の御心は、敢て獨身の生活を希望せられたのであらう。昔は香樹院徳龍講師は、お若い頃から求道修道の志深く、遂に無妻獨身の行狀で生涯を過ごされ、世に稀なる篤信の念佛者であり、學徳高き人格であらせられた。今や現代に我等を照育せられたる第二の香樹院師は住田先生であつた。天台宗が寛永寺門跡に妻帶の僧を任命せねばならぬやうになつて座主を苦悶せしめて居た時に、我が眞宗大谷派に住田先生と山田文昭先生と二名の無妻獨身の學徳者があつたといふことは、末代濁世の今日、實に不思議な事であり珍らしい事である。

林五邦教授略年譜並遺著目錄

一、略年譜

- 明治二十七年四月二十九日 金澤市堀込町五番地に生る。
- 大正 七年六月 眞宗大谷大學專修科卒業 補權僧都。
- 大正 八年五月 東京駐在を命ぜらる。
- 大正 九年八月 東京駐在辭任。
- 大正十四年三月 研究科卒業、擬講、僧都に補せらる。
- 大正十四年四月 大谷大學豫科教授、學部教授囑託に任せらる。
- 昭和 二年二月 臨時學生監を命ぜらる。
- 昭和 二年四月 學生監事務取扱を命ぜらる。
- 昭和 三年三月 學生監事務取扱辭任。
- 昭和 四年六月 大谷大學々生監事務取扱を命ぜらる。
- 昭和 五年四月 學生監を兼任せらる。
- 昭和 六年四月 豫科教授並に學生監辭任。
- 昭和十一年四月 大谷大學々部教授囑託に任せらる。
- 昭和十一年七月 權大僧都に補せらる。
- 昭和十二年四月 大谷大學々部教授に任せらる。



昭和十三年十月二十六日午前八時五十分 洛北寓居に於て往生

す。「法爾院釋五邦」なる院號法名を下附せらる。

二、著書(發行年代順)

一、根本佛教聖典叢書中

第一卷長阿含

大正十二年

第二卷中阿含

大正十三年

第十一卷長阿含世記經

大正十三年

二、國譯一切經中

增一阿含三卷

昭和 四年

顯宗論一卷

昭和 四年

樂邦文類一卷

昭和十一年

三、佛教聖典叢書中の「佛涅槃經」外數篇

昭和四、五年

四、マハーヅンサ(巴利文和譯)

昭和 七年

五、カタワツトウニ卷(巴利文和譯)

昭和 七年

六、巴利佛典(佛教大學講座)

昭和 八年

七、南傳大藏經相應部一卷

昭和十一年

八、求道と人生

昭和十二年

三、論文(發表年代順)

一、正量部の思想及びその教示 佛教研究第六卷第二號

大正十四年

二、轉法輪經 佛座七

大正十五年

三、釋尊と苦行主義 佛座三

大正十五年

四、二種の涅槃界について 大谷學報第十九卷第四號

昭和十三年

四、遺稿(ノート)

阿含の教義概観

阿毘達磨の概説

部派佛教の概観

阿含尼柯耶の諸問題

巴利語文法講案

(佐々木現順編)

人間林五邦氏

日野環

何かの都合で大谷大學の北裏にあたる北大路の電車道までゆくと今でも思はず大徳寺の方へ足が向くことがある。氏は大徳寺近くの石龍町一九の家で最後の息を引きとられたのです。それは昨年十月廿六日午前八時五十分頃です。電話によつて私がかけて付けたのは九時半頃でした。夫人や看護に當つた姪の方々によつて白衣に着替へさせられたところでした。渡された黒衣と墨袈裟とを着せしめ珠数をかけしめて氏は棄摠入無爲の立派な法體になられた。かくて靜かに稽首合掌したことあります。

報によつて走せ集まる友人知己門下生の人々の手で萬端の世話はなされたのですが、殊に正親含英氏・岩見護氏がこのために没頭されたのであります。九州旅行中の曉島敏師の來着を待つて廿七日夕密葬を行ひ廿八日午後、

大學の近くの法泉寺に於て本葬を行ひましたが、大學の教職員學生は云ふまでもなく本山重役の人々の會葬もあつて有縁の人々堂にあふれ誠に故人生前の徳を偲ぼしめるものがありました。

近來の氏の姿が餘りに枯れすぎた觀を與へてゐたのです。昨年正月國から歸ると早々訪ねてみるとどうも都合が悪いと云ふ醫者は胃酸過多だと云ふ由で全く元氣がなく、その時の氏の言葉に去年の暮年會がたつたらしいと云ふ。——氏のお宅で友人數人でスキ鍋をつつき、飲みかつ食ひお抹茶番茶お菓子果物と、思へばいさゝか無理をした事ですが、話が歡談快談閑談にうつつて誰の責任だ彼の責任だ云ふことになつた時、結局これは奥さんの責任で、それは近來お抹茶の御手前を盛んに稽古してを

られたがそも／＼背の君の胃袋をコボシと心得て立てたお茶は悉くなげ込む、それが抑の原因だと私は結論して憤慨されたり笑つたりした事でした。病氣が閑談の題目になるうちはよかつたのです。どうもはか／＼しくない吾等友人の間でも少し變だぞと本氣に心配になり出して来たのです。果して肝臓癌と云ふ不治の病であつたのです。どうせ死ぬなら教壇で倒れやうと云ふ熱意を押へて休養をすゝめて以來殊に人戀しさの心が増して近くの正親氏の宅など一日四回も訪ねると云ふ程でした。愈々再起不可能と覺悟してからはたま／＼訪ねても葬式の話ばかりで返答も出来かねて困らされると云ふ始末です。病床には友人知己から贈られた花などが奥様の心盡して生けられてをる、枕頭の小さな手帖には浮び來る感懷を三十一文字に盛つて書付けられ、のみならず危篤電報をうつところ死亡電報をうつところまで住所氏名が書かれてある。それはまだしも葬式の案内状の原稿まで書けと云ひ出される始末で岩見正親の二君などもこれには一寸困らされた事でした。物様によく氣がついて氣マメ足マメ

住田・林兩先生を偲ぶ

世話すき親切の氣性が最後までつゞいた事です。

密葬の夜、誦經の後曉烏師が林老母堂に對して慰めの法話があつた。それを聞いて思ふた事ですが、五邦兄が加賀の小松町の木ノ本仁三郎氏の三男と生れて金澤市堀込町の林家に入つてこれを嗣がれる様になつたのも互に曉烏師の法縁を通じての事でした。七歳の頃より北安田明達寺の日曜學校に入り曉烏氏と縁が結ばれた事が氏の生涯のコースを決定的にした事です。五邦兄が理解ある林母堂を母とされたのも眞宗大谷大學に入られたのもまた私どもと知友の交りをなし得たのも因は明達寺の日曜學校にある。誠に因縁の不思議を感じる者であります。今この因縁の深い師の心に包まれて葬せられた。以て君冥すべしと思ふ。

○

學生としての氏を餘り知らない。たゞ尋源會（學友會に相當するもの）の委員として、卒業生送別會の時なした挨拶、その時の印象は今に残つてをる。當時曉烏師を中心として高光大船、藤原鐵乘の二氏が双翼となつて加

賀から「汎濫」と云ふ雜誌が出てゐた。氏もその同人である。その思想傾向は、反形而上學的。反正統的、反學問的。一種のヒューマニズムであつた。思辨的形而上學的傾向にあつた自分は「汎濫」は大嫌ひであつた。當時の大學にはコツコツ勉強する連中は別として、哲學的な方法を用いて佛教學眞宗學に於て思辨して行かうとする論理主義的な傾向。祖國日本と眞宗とを結ばんとする親鸞主義、南無日本の提唱、「汎濫」によつて代表されるヒューマニズム。トルストイやドストエフスキー等のロシア文學に表現された人間性、人間惡を通して眞宗の信仰を味つてゆかうとする隱者的傾向。宗政家と交つて實踐的に大學を牛耳らうとする政治的傾向。これ等の諸傾向がかなり明白に堂々と對立してゐたのです。これ等の一方の雄がそこかしこに頭を並べてゐる事を思ふと一寸ほゝ笑ましい事です。

眞宗大學卒業後、一年餘り東京駐在として活動し大正十年研究科に入つて原始佛敎の研究に志し赤沼教授の指導をうけるや百八十度の回轉をやり當時入手困難の巴利

語の彪大な字書を二冊も丹念に書寫してゐました。これは氏の子孫にとつて何よりも貴い形見だと思ふ。當時君は紫竹の邊に住し私は上賀茂をつた。交遊はこの頃から深くなりました。薫子夫人と結婚されたのもこの頃であり軽い乍ら胸を病まれたのもこの頃でした。當時毎日奥さんからの手紙にはいさゝか憤慨せしめられたものです。その頃私は宮嶋に旅行したので、杓子に相合傘を書いて林夫妻に贈つたことがあります、今度氏が亡くなられて一寸見度もものがあつて、書類をしらべて頂いてみるとこの古い相合傘の杓子にゆきあたり思はず笑つた事です。

○

私どもの知つてゐる限りに於て最も強く氏をうつたものは學校の事件と、三女則子さんを亡くした事と赤沼先生を失つた事だと思はれます。昭和八年六月、九州久留米の傳道學院指導中に三女則子さんが病を發した。遠くはなれてゐて如何に案じめぐらしかつ看護される夫人の辛勞をいたわつたかは次の手紙の一部でもわかる――

昨夜遅く歸へり十七日付のハガキ拜見殊の外胸をいた

め候、此上にも快かれとのみ念ぜられ候、瘦せこけて

小さく氷袋と枕に頭を埋めてゐる則子を思ひつゞけを

り候、何分とも遠隔のところ傍にゐたところがどうに

もならぬことながら離れをること何よりの淋しさに候

院の生活も何分とも主體に候まゝ、これを中途に放棄す

ること遙るゝ出て來し甲斐もなく候……心にかゝ

りつゝも萬事醫師に信賴いたし皆々のお世話にお委せ

いたしてと存じをり候……打電をはらゝいたしを

り候、打電の要之ある節は醫師の言葉の上下され度そ

の節は歸國いたすべく候……入院してゐると日も忘

れると見えて十八日が十九日の報知と相成をり候心情

御祭し申しをり候 父に代りて御看護下され度候

廿日朝

林 生

薫どの

三年後昭和十年の冬同じく九州に旅行しつゝもなき愛

兒の上に思ひが走つてならなかつた。國の妻子が案ぜられてならなかつたのです。

西の海のはてに來て思ふあが妻子吹雪の空にいかにし

つらむ

海靜か空青々とくももなしにかにあるらむ冬の故郷

郷

よせ返す波間に拾ふ貝殻をわれ待つ故郷の手工産にせ

む

小松原亡き人眠る墓地に來てゆきし子偲ぶ吾子やいづ

ここに

この手紙や歌などから見ても氏には非常に家庭的で血縁に對する心遣ひが深かつた。一見淡々と見えて極めて人情的でまた一たん因縁を結んだ人々は終生何等かの意味に於て關心なしにはをれないと云ふ質でした。

○ 蟲送りの太鼓の音をきゝて、(昭和十二年)

ドンドコと宵闇つきて鳴りわたる太鼓の音に蟲を送る
か

大いなる太鼓になひて若人らドンドコ鳴らし蟲を送る
か

わが姪の新妻姿かひかひし亡き姉あらば喜びいかに
と

子等の上につきぬ念ひをひたよせに苦しみ悶え姉は逝
きしか

○ 氏の最後まで看病の勞をとられたのがこの歌にある姪
さんであつたのです。また赤沼先生の逝去をいたみ十二
年十一月末日によまれたものが數首あり。また病床にて
この師の一週忌をきいてよんだものもあります。

○ 師の君の病み臥したまへばひたすらに癒えましますと
いのりしものを

あれやこれ心を千々に碎きては教子の上に手びきたま

へり

老ひませる母君妹子いとし子を殘しつ君はみまかり
ませり

ふりしきる吹雪の中を師の君のひつぎの車ひたに走れ
り

ありし日の師の君偲びまつりてははるかにをろがみ御
名をとなふる (故赤沼先生の一週忌營まるゝときにて)

○ しばし、病床を訪ねて受けた印象は、死に對するやす
こぶる從容、生に對するやすこぶる微妙なものがありま
した。それは病床の雜咏に現れてをります。愈々人間味
があふれて來てその咏草を見るに立派な詩人になり切つ
てゐられた。晝鳥師に對面のようなこび老母堂に對する感
謝、夫人に對するねぎらひ子供に對する思ひやり、氏の
家庭は、しつとりと法に結ばれ彼岸に約束されたものに
なつてゐたのであります。病苦を通じて人間がいよゝゝ
成就しつゝあつたのであります。

○ 病床雜咏

待ち侘びし師の君よこそ來ませしか言の葉もなく涙こ

ほる、(晴島先生の見舞はれしに)

老いませる母と兄とを迎へては言の葉もなく胸ぞつまれる

故里の兄君迎へ謠聲をこの世の名残に聞かんとぞ思

ふ

久にきく田村羽衣兄君のさびし謠聲嬉しなつかし

生き死にはみことのまゝにかしこみていのちのかぎり生きてあらなむ

はらからのつどへば酒を汲み交し語らひあひしいにし

へ偲ばゆ

われを見によくぞ來ませり姉君ようれしなつかし待ち

わびにけり

老いませる母君みとることなくて先立つことの心苦し

も

老いませる母君ひとりふるさとに心痛めつ沈みたまふ

か

ひとり居の老いの母君われなくば力落してなげきたま

はん

父逝かば末はいかにとひそひそと語らふ吾子の心いと

ほし

父病みて姿かはればものいふにはぢらふ吾子の心いと

ほし

枕邊に花を生くればへやぬちの重苦しきもなごみぬる

かな

枕邊の色とりどりのダリヤ花へやぬち馨り心や

か

友ぬちの厚きなさけのとりどりの花生けられて枕べに

あり

臥せるわれ心地よければ久々に吾妹茶を點てわれをな

ぐさむ (この世の名残にとて我を正客として點茶す)

わが病めば吾妹名残の茶事すとて涙をのみて杓をかま

ふる

かすかずの情けの恵みわれ受けて厚き心に涙するか

な

曇りなき永久のいのちに我れ生きてともにしあれば歎

かざらなむ (吾妹に)

曇りなき永久のいのちを力とし御名をとなへよ吾子よ
吾妹子よ

生死は細きかひこの絲の上にくろびまろびつたゝかひ
あへり

やせこけて昔もあらはの衰れなる姿となりてなほも生
くるか

うつし世のなごりはつきねみほとけのめしのまにまに
浄土にかへるか

はかりなきいのちと光につままれて心おきなく浄土に
かへらむ

いざさらばあつきなきけにわれ生きぬほとけのみくに
近づきませり

○

昭和十一年一月卅一日夜、私の不在の折に私の自坊は
炎上して一切烏有に歸し、研究資料等は云ふまでもない
いや應なしに岐路に立つた私でした。氏の歌の草稿に、

○ 日野君に與ふ

旅空に君がみ寺の炎上をきゝて驚く君やいかにと

雪深き奥の里よりかへり來て燒跡に立つ君ぞ痛
まし

侘び住ひ爐邊の焚火にほてりつゝ君もの思ふ姿ほの見
ゆ

祝融の禍ものかは雄々しくも君立ちませよ燒野の原
に

○

何等の幸ぞ、私はよい師友を多く恵まれてをる。氏も
亦最も有難き友人の一人でした。氏は友とは云へ見であ
り叔父さんであり時には親の權威を以て迫つて來たもの
です。腹が立つても立つた腹がいつの間にかどこかへ行
つてしまふ。強情で野放圖な私の性分が氣懸りの種子で
あつたと有難く思ふ。氏にとつて私は靴の中へころけ込
んだ小石の様に氣にせまいと思ふても氣になる存在であ
つたのです。今日まで私は林五邦兄の配慮の貸り方には
かり廻つてゐました。氏を失つた事がほんとうに淋しい
こんな時に彼がゐてくれたならと眞身にしみて思ふ時が
生涯には必ずある事でせう。遺族の方々の御安穩を念じ
て稽首し奉る。(昭和十四年一月廿三日)

林 先生 の 學 風

舟 橋 一 哉

林先生から直接教を受けた末學の一人として、この機會に今は亡き師の學風の一端を偲び、以つて自分自身に對する誠めとしたいと思ふ。勿論此だけで先生の學風を残りなく言ひ盡した譯ではなく、恐らく時代と共に先生の學問に對する新たな認識が深められるには違ひないが然し茲で先生を追憶する一つのよすがとして、先生の學風の良さを思うて見る事も、強ち無意味ではなからうと思ふ。唯淺學非才の身を以つては、深奥なる先生の學風はその一端をも正しく傳へる事が出來ず、徒に先生の遺徳を傷つけん事を恐れるばかりである。

私は、先生の學風の特徴としては、第一に先生の學問が綜合的であつたと言ふ事を上げなくてはならないと思ふ。若し、狭いが深く突き込んで研究する人と、それ程深くはないが廣く互つて研究する人とあるならば、先生

は後者のタイプに屬して居られたと思ふ。勿論斯様な言ひ方は極めて蓋然的なもので、先生にあつても、御専門の阿含尼柯耶の教理、或は部派佛敎の教理、これ等に關しては獨自の見解も有しては居られたが、しかし何方かと言へば、先生の學問に於ては、その偉大なる綜合力を以つて廣く互るといふことが、最も大きな特徴であつた様に思ふ。本誌前號に執筆せられた「二種の涅槃界に就いて」は、最もよくこの風格を顯はしてゐると思ふ。この論文は編輯後記にもある様に、先生が病の重い事を自覺せられ、再び立つ能はざるを覺悟せられてから、悠悠々迫らざる態度を以つて、日頃の講義のノートの一部を纏められたものであるから、學校に於ける先生の講義は總てこの様なものであつたと見てよい。あの論文を讀んで見ると、その所論の如何よりは、先づ以つて、あの杉大

な資料を、系統的に整理せられた絶大な努力に驚かされる。實に資料の集輯と言ふ事に就いては、先生は非凡の才能を持つて居られた。先生の遺著「巴利文邦譯大史」を見て、「同論事」を見ても、この感は深い。特に「大史」の如きは、綿密なる考證の下に漢巴の資料を網羅して之を注記して居られる。斯くの如きは能く一朝一夕に爲し得る所では決してない。先生の多方面に亙る讀書とその綜合力の結果であると思ふ。私自身この點甚だ慚愧に堪へないので、私は先生のこの方面に特に敬慕の念を禁じ得ない。赤沼先生の遺稿の整理に携つても、矢張り同じ事を感じさせられる。斯くまでに多くの資料を集輯し整理して、始めて筆を執る學者が、今日幾人あらうか。考へさせられる問題である。

この綜合的であると言ふことからして、必然的に出て来る先生の學風の特徴の一つは、一見極めて地味な事である。華々しい所がない。恐らく先生は他人と論戰せられた様な事はなかつたらうと思ふ。學的な論文の数も割合に少いし、堂々の論陣を張つて自己の主張を守ると言ふ

様な事も無かつた爲に、又世間がアツと驚く様な斬新な學説を發表せられた事もなかつた爲に、稍もすれば我が國の佛敎學界に於ける先生の地位を、無理に低く評價しようとしてゐる様に思はれるが、學問の價値はそんな事だけで決まるものでは決してない。斯う言ふ學風は或は現代的でないとも言ひ得る。目の覺める様な鋭さが無いからである。「俱舍論釋古」を書いて佛敎の研究方法に一新機軸を出した法幢の持つあの鋭さ、さう言ふものを林先生に要求するのは要求する方が無理だと思ふ。さうではなくして「冠導俱舍論」を編輯した旭雅の持つ博識、言ひ換へれば資料の集輯とその整理と、それからその時代に於いて最高水準を示す所の學説の蒐集とその理解、これこそ先生の學問を永遠に價値づけるものであると思ふ。

更にもう一つ、先生の學問に於ては、絶大な努力と言ふ事がその特徴の一つになつてゐると思ふ。努力のない學問は有り得ないには違ひないが、しかしその學風として比較的に勞せずして相當の成果を上げ得る人もある。現代に於ては斯う言ふ學風の方が幅をきかして、先生の如

き學風が片隅へ押し込められてゐる様な氣がしてならぬ。然し努力の足りない論文は、一讀した時「成る程面白いと思ひ付きだ」と言ふ感じはしても二度三度讀んで見たいと言ふ氣にはならぬ。況んや座右に備へて置いて自分の研究に役立たせると言ふ様な事は殆ど有り得ない。斯う言ふ意味から言ふならば、林先生の書かれたもの等は、手近な所に備へて置けば、屹度役立つ時が来る。妙な言ひ方ではあるが、先生の如きは我々末輩に利用せられんが爲に論文を書き、書物を著はされた様なものである。

以上私の腦裡に刻みつけられてゐる先生の學風の一端を述べたが、更に附け加へて言へば、實に先生は「原始佛教の概論」の講義に於ては妙を得て居られた。元來概論と言ふものはさう簡單に出来るものではない。その性質から言へば、恐らく最も困難な、又最後になさるべきものなのであらう。個々の問題に就いての深い理解がなくしては、全體に互つての概論は企て得ない筈のものであるからである。私は學部二回生の時、即ち昭和五年度に

「阿含の教義概観」と言ふ題で先生の講義を聴いた。此は言ひ換へれば「原始佛教概論」なのであるが、實に立派な講義で、今でもそのノートは常に座右に備へて居る。然も先生の學部での講義としては、巴利語の文法と講讀を除いては、最初のものであつたと記憶してゐる。この一事を以つてしても、先生の學風の全貌を髣髴する事が出来るのではないかと思ふ。(十二月十九日夜)